『家の光』北海道版 2011 年８月号

被災地の農家にエール　農産物とともに、思いを届けたい

㈲ファミリーファーム夏井　　夏井 岩男さん（北海道名寄市）

3•11 の東日本大震災、それによる大津波の爪痕がいまだ生々しく残されている。被災地の力になろうと、それぞれの場所で、さまざまなネットワークを生かしながら取り組みが続いている。

昼夜の温度差が大きく、おいしい野菜が生産できる道北の名寄盆地。40ha 余りの畑で露地野菜を栽培している「(有）ファミリーファーム夏井」は、名寄市智恵文（ちえぶん）地区の一角にある。

道北地方は、春先から天候不順の日が続き、畑がなかなか乾かない。農作業は半月ほど遅れた。こんな年も珍しい。

５月中旬に農場を訪れると、ハウスの中でスイートコーンの苗が順調に生育していた。順ぐりに定植していき、８月から 10 月にかけて収穫する。

「スイートコーンは、輪切りにしてボイルしても、焼いてもおいしく、どんな食べ方もできる作物。収穫期になったら、数千本を東日本大震災の被災地に提供し、皆さんに食べていただく予定です」

と、夏井岩男さん（72）が話す。

新規就農者の研修受け入れや、地域農業の振興などに協力する「指導農業士」の認定を受けてから 23 年。いま、東北地方などで暮らす農家の仲間たちと連携し、被災地に農産物を提供しながら絆を強めていく、地道な取り組みを始めている。

おいしい野菜を復興の一助に
北海道から支えたい

夏井さんの祖父は大正６年、現在の岩手県久慈市から名寄市（当時は名寄町中名寄地区）に入植しており、もともと東北との縁が深い。先祖代々のつながりのなかで、毎年のように岩手を訪れて親類の人たちと交流し、特産物のやり取りなどを続けてきた。

今回の大震災では、久慈市にも津波が押し寄せ船舶や水産施設が流され、住宅が損壊するなど大きな被害に遭った。一方、農村地帯は山あいのところが多く、被害は比較的少なかったという。

ゆかりの地で起きた震災に心を痛めていた夏井さんは、当初、義援金を送ろうと思った。しかし、宮城県内に住む指導農業士の仲間が津波で亡くなったと聞き、農産物をとおして何かできないだろうか、と模索する。

「人生にとって、地震という悪魔と戦うのは瞬間的ですが、復興後の幸せは亀の歩みのようにゆっくりとやってくる。わたしも病気や災難に見舞われたことがあるので、よくわかります。小さくても農産物という志を贈れば、『そうか、頑張ろう！』と思ってもらえるんじゃないか…」

そう考え、収穫する野菜の一部を被災地に送ることにした。野菜農家の一員として復興に向けた

歩みを支えたい、という願いを込めている。

夏井さんは、昭和32年に地元の農業高校の季節定時制を卒業後、名寄市内の傾斜地で苦労しながら、畑作と畜産を営んだ。20代の頃、健康がすぐれず、敗血症と診断されて一年間の闘病生活を送る。退院後は、治療のかたわら道南の野菜先進地へ研修に入り、条件不利地での農業から脱出をめざす。

仲間たちと「えびすカボチャ」の産地づくりに奔走する一方、30歳のときに以前の場所から15㎞離れた現在地へ移り、大規模な野菜経営へ転換していく。記帳やパソコンによる経営分析と作物の栽培データの分析を徹底して行ない、緑肥などの鋤(す)き込みによる輪作体系を実践。綿密な経営計画書の作成と実行を提案する、「リハーサル農業」のパイオニアとしても知られている。

名寄盆地は、昼夜の温度差が大きいのが特徴だ。これで、野菜は糖分やデンプンを蓄えて、よりおいしくなる。昭和58年には日本農業賞を受賞し、全国指導農業士連絡協議会の会長も務めた。

そんな波乱に富んだ人生を送ってきただけに、被災地の人たちを元気づけたいという気持ちがひと一倍強いようだ。

東北地方の被災地に提供するのは、初夏のアスパラガス、夏場のスイートコーン、秋のカボチャを中心に、晩秋のハクサイやキャベツも検討している。

「これらの農産物の配布先は、指導農業士のネットワークを生かして、仲間たちに考えてもらいます。被災地の避難所では生鮮食品が不足していると聞くので、『おいしかったよ』と言ってもらえるとうれしい。今後の交流に向けた、心のキャッチボールができるといいですね」

と、夏井さんが期待を込める。

宮城県の仲間を橋渡し役に
農産物を避難所に送り届けたい

宮城県角田市で米や果樹などを栽培する松沢栄子さん（62）は、夏井さん一家とは20年来の付き合いになる。東北６県と北海道との指導農業士の交流会で、たまたま隣に座ったのが夏井さん。それが縁で、たがいに行き来したり、カボチャなどを送ってもらったりしてきた。

太平洋に面した隣の亘理(わたり)町では、津波で大きな被害を受け、５月下旬になっても千人ほどが避難所生活を送る。角田市内の津波被害はほとんどなかったが、近隣の避難所からやってくる人たちで古い住宅やアパートは満杯状態だという。

松沢さんは地震の２日後の３月13日、５人ほどの農家仲間で力を合わせ、産直広場「あぐりっと」を再開した。停電と断水が続くなか、持ち寄った水でご飯を炊き、おにぎりを作って格安で販売。おおぜいの人が訪れ、300個のおにぎりがすぐに売り切れた。

そんな経験もあるので、夏井さんの提案には全面的に協力していく。宮城県北部では、登米(とめ)市に住む仲間の芳賀みよ子さん（62）が橋渡し役になった。

「県内にある大小さまざまな避難所のどこに、名寄からの農産物を提供すればいいのか、農業改良普及センターや県と相談して決めています。個人からの支援物資を避難所に受け入れるのは難しい

ので、宮城県の指導農業士会に働きかけたい。食料を作る農家でも、日ごろの交流がなければ、夏井さんのような取り組みはなかなかできません。とても、ありがたいことですね」（松沢さん）

地震発生から時間がたち、被災地や避難所によって必要な支援物資が多様化している。それぞれのニーズを確認しつつ、農産物を送り届けることの難しさもある。

「彼女たちは、うちの農場のことをまるで自分の農場のように、よく知っています。現地をよく知る人とのつきあいやコーディネートがないと、この試みは実現しなかったでしょう。今後は、私のも東北を訪ね、同業者同士で助け合っていきたいですね」

と、夏井さんが意欲を見せる。指導農業士のネットワークを生かし、北海道と東北をつなぐ営みは始まったばかりだ。